

# 理想に燃えた男の一代記

宮澤保夫 著

世の中には石橋をたたくまでも渡らない慎重派と、走りながら考える行動派がいる。著者は間違いなく後者のタイプだ。

小学生の時にチェ・ゲバラの思想に出会い、高校時代はベ平連の反戦運動にのめり込む。慶応大学通信課程の学生なのに、正規の授業やゼミに出席し、世界中の無線仲間を訪ねては海外での見聞を広めていく。

理想に燃え、エネルギーを枯らしはまりながらも、当時の青年像を、そのまま遺稿まで貫いた団塊世代男の痛快な一代記である。

22歳で始めた私塾は今や幼稚園から大学まで1万6500人が集う「星樞(せいす)グループ」に発展した。不登校や軽度発達障害などの生徒を対象にした「関わりあい教育」は、個性を伸ばす「好きなことを伸ばす学習法」で定評がある。通信制の多くは他校の教室を借りするが、仲間と田舎を闊歩する「く」のために全国各地に「学習センター」を設置したのもユニークだ。つじには「く」をも理解できる大人育てのための「誰でも、いつでも、どこでも」生涯学習型の通信制大学まで創っています。

設立認可や学校運営のための官公庁との折衝や攻防、ヤクザとの命懸けの駆け引き、資金作りをやらしたサイドビジネスの失敗や部下の裏切り、膨大な借金、会社倒産とその裁判騒動、教師たちの追放など、追い詰められてからの逆転劇の連続は小説よの面白

い。ただし著者も人の子。時に絶望し、孤独に耐え、自責の念で落ち込む弱さも見せて共感を呼ぶ。目下、がんで闘病中だが、「めげな、考えよ、そして行動を起こせ。道は必ず開ける」というアドバイスには、理想を実現させた実績の重みがある。

学校時代の「人を排除しない」「人を認める」「仲間を作る」の3原則は、そのまま「人の共生」の原動力だったと再認識させられる書である。

(宮本まき子・家族問題評論家)

みやざわ・やすお 星樞グループ会長。不登校の生徒らを対象にした「関わりあい」教育などで知られる。



(角川書店・1575円)

## 「人生を逆転する学校」